

# 北斎漫画

## に魅せられて

### ベジエ曲線による模写

SSN 486 池川 英純



「北斎漫画」は、江戸末期に絵手本（絵の教科書）として葛飾北斎の下絵による木版で刊行された和綴じ本です。当時、空前の高い評判を呼び15編（シリーズ）に及ぶベストセラーとなりました。絵の収録も4千点に達するとされます。また、海外にも広く知られ、西欧における19世紀後半の芸術運動ジャポニスムにも少なからず寄与と云われます。

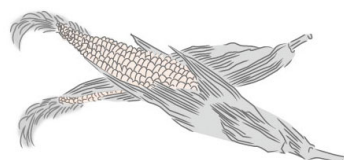


私はこの「北斎漫画」をパソコンの描画ソフト「イラストレーター」のペンツール（＝ベジエ曲線）という描画方式で模写することを数年前から試んでいます。ベジエ曲線はフランスの自動車会社ルノーの技師ベジエ氏らが工業デザイン向けに開発したコンピュータ用の描画方式です。この方式をパソコンでも利用するわけです。この方式は他のパソコンの描画方式と比べ操作方法が大きく違い、初めは操作に戸惑いましたが慣れると複雑かつ微妙な曲線を描くには非常に便利な方式だと実感しています。



「北斎漫画」の模写を重ねるにつれて、その絵の凄さ素晴らしさに心酔する度合も増して、今はまさに”魅せられて”の状態です。しかし、模写は習作、つまり勉強のための作画です。私の模写した絵にいささかの価値もないと自覚しています。わが齢今80代前半。何時までも模写を続けるわけには行きません。閻魔様にお迎えを後10年ほど待ってもらい、その間、今まで「北斎漫画」から学んだ教えを糧として、模写でなく下手でも自分の絵をベジエ曲線で描きたいと思います。その契機になればと考え、今まで模写した絵の一部を以降のページに掲載しました。皆様のご意見、ご指導を頂ければ幸いです。

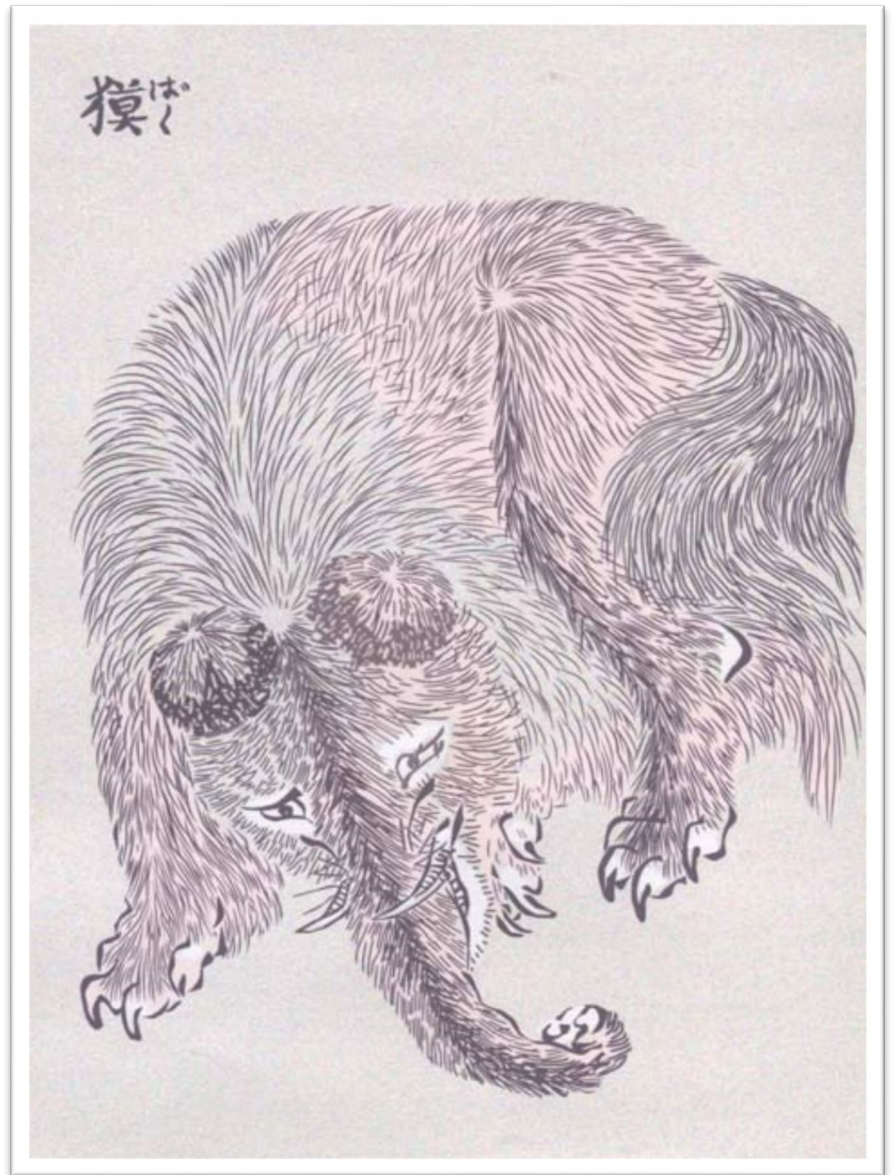
※カットは、いずれも「北斎漫画」を模写した絵です



### P1-1. 獾

中国古代の想像上の動物。悪夢を喰うという。

毛の線が中心の絵。北斎は絵の初心者には、まず、毛を反復して描くことで、筆使い練習をさせたかったのであろう。



### P1-2. ゆうれい

これも筆使いの練習を主目的とした絵だろう。

## P2. 魚濫観世音



観音も魚も波もS字状カーブで描かれている。大河の中の悠々とした情景を表現するためと思う。線の数が多い。とくに一つの鱗を多くの細かい線で表現している。この鱗をパソコンで模写するだけで私は数日かかった。当時、この絵を筆で模写する学び手にとっても、かなりヘビーな作業だったろう。「大胆さと緻密さ」、模写していると、まるで経営学の講義を聴いているような気分になる。これが北斎の教える作画に対する心構えのコアなのか。

### P3. 飛上獅子



獅子の目は飛び上がらんとする先の雲を凝視し、口を固く閉じて次の行動に移る決意を示す。飛躍力を高めるため、体は弓をように折り曲げ、尾はバネのようにきつく丸め弾く瞬間をまつ。四肢と爪は強く台地を圧して発進力高めているかに見える。躍動感のある絵はかく描くべきと教える絵だと思う。

#### P4. 劉玄徳



昔、読んだ吉川英治の「三国志」の微かな記憶によれば、戦いに敗れた劉玄徳が、命からがら逃げる光景の絵だと思う。玄徳も、馬も、川の波も、兩岸の様さえも全て45度近い傾斜となっている。緊迫な事態を表現する絵だと思う。

## P5. 殷の妲己と孫悟空



この絵は不思議な絵である。初めは「殷の妲己」と「孫悟空」は関係ないが、妲己の絵に余白が出たため、孫悟空の絵を入れたのだと思った（このような例は北斎漫画には多数ある）。しかしよく見ると、どうも一つの物語を描いた絵に見える。

そうだとすると、日本の伝説を中国の伝説になぞらえて描いたと思われる。平安時代末期に鳥羽上皇の寵姫であった玉藻御前、実は妖狐（九尾の狐）の化身であった。陰陽師に正体を見破られ今の栃木県那須郡辺りに逃亡、朝廷から討伐軍を差し向けられた。玉藻は妖術で必死に応戦したが力尽きて殺され殺生石となった、という伝説がある。そう考えると、影武者を使って戦っている孫悟空は、玉藻御前の代わりの姿と云うことになる。

幕末、尊王論が高まってきた折、皇室に関わる伝説を描くことは、はばかりがあるので中国古代の伝説として描いたのでないか。これ私の想像。このような謎かけのような絵が「北斎漫画」に多数ある。それをあれこれ考えながら模写するのも楽しみの一つである。

P6-1.風（かぜ）

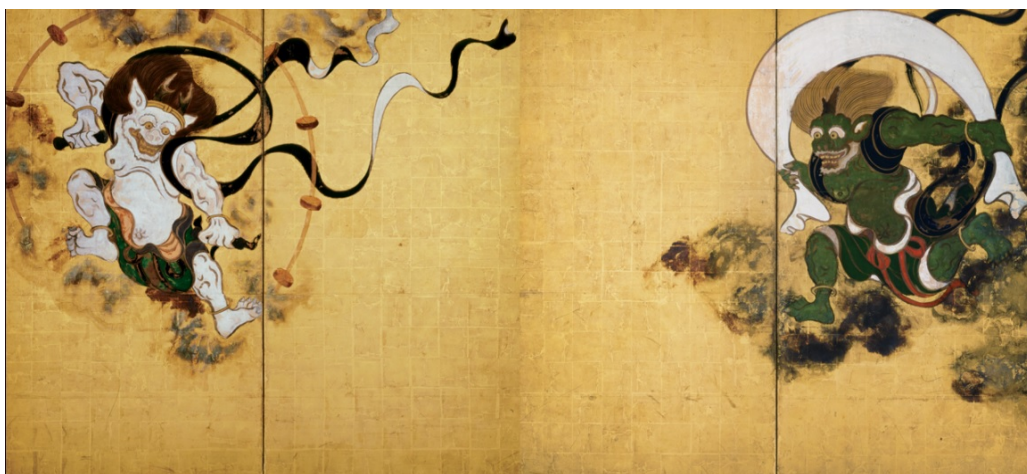
No6-2.雷（らい）



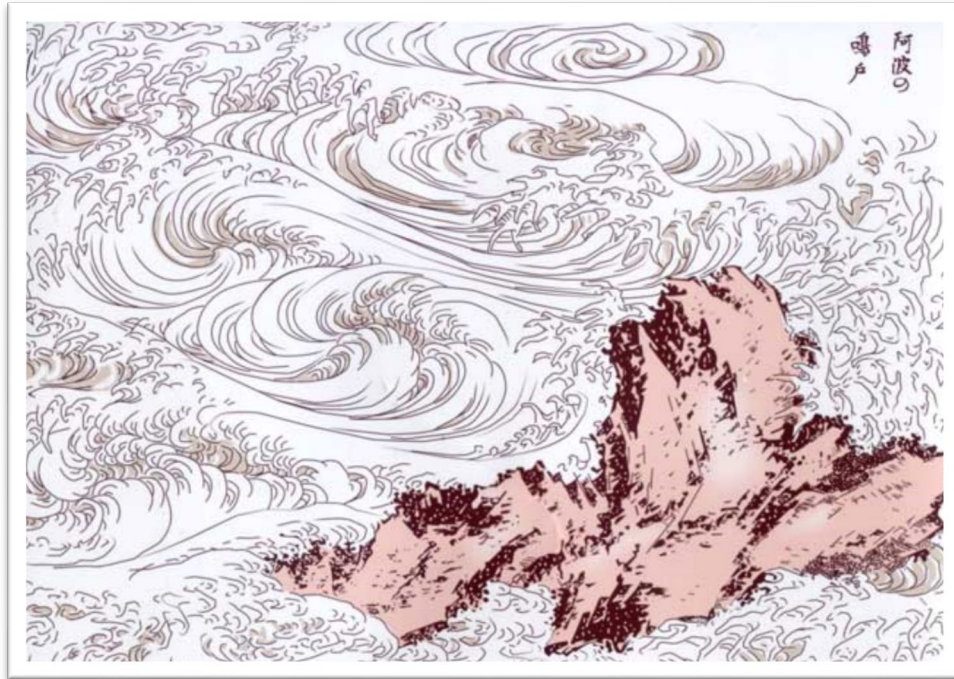
上の絵は、「北斎漫画」の絵。下の絵は、宗達の国宝「風神雷神図」（京都市・建仁寺蔵）。初心者のための絵手本の絵と名刹の屏風絵を比較するのはどうかと思うが、両作者者の絵に対する方向がよく分かると思う。

違いは、まず雷と風の位置（右・左）。宗達の絵は、伝統的、装飾的、均衡美。一方北斎は、非伝統的、進取的、躍動美。

※俵屋宗達 作 「風神雷神図」

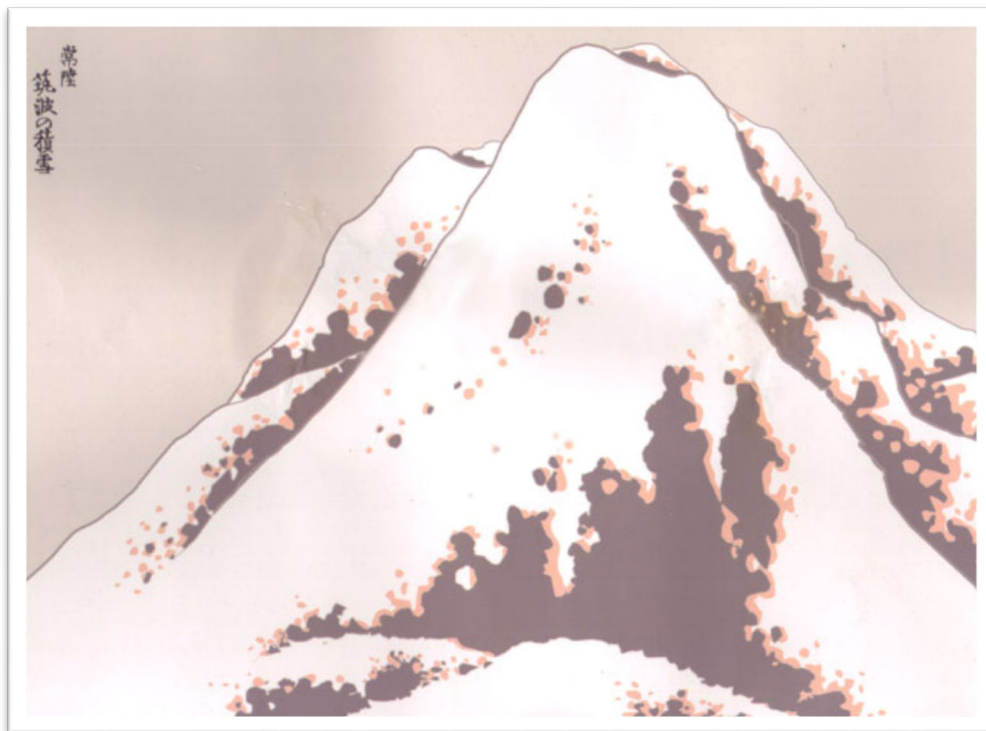


## P7-1. 阿波の鳴戸



「北斎漫画」には、海、川、引き潮、満ち潮、急流、暖流、大河、小川等における々の様々な波の絵を掲載している。いずれの絵にも波に対する強い執着心、確かな観察力が窺われる。それらの作画が総合、収れんして生まれたのが傑作として名高い「神奈川沖波裏」であろう。

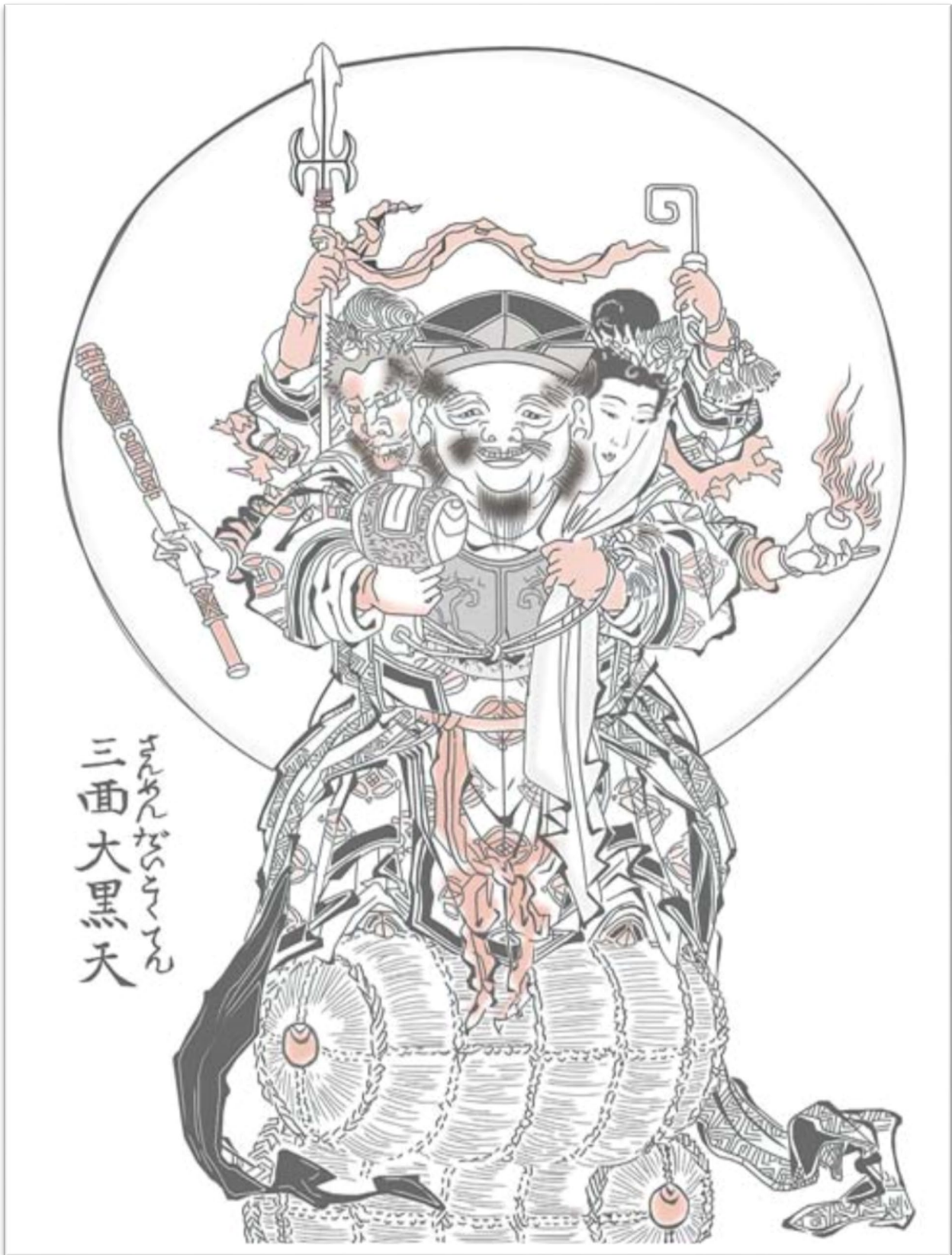
## P7-2. 筑波の積雪



「北斎漫画」の中では、変わった描き方の絵である。このように北斎は違う系統の絵もあわせて見せてくれるのも北斎画の魅力である。



P8. 三面大黒天



豊臣秀吉がお守りにしたという、大黒天、毘沙門天、弁財天の三神が合体して一体となった、ちょっと欲張りな神様。彫刻のお守りが普通で、絵は珍しいという。このように庶民に馴染み深いものの絵も多数収録されているのが、「北斎漫画」人気理由の一つと思う。

P9. 白ねずみ



正月の鏡もちに群がる白ねずみの図。白ねずみは辞書によると「大黒の使者といわれ、吉兆とされた」とある。北斎は絵の題を「銀鼠」と記し「しろねず」とか仮名をふった。当時、江戸では「銀」の色を「しろ」と呼び、あるいは「しろ」の色を「銀」と書き、鼠を「ねず」とも言ったことが分かる。模写していると絵以外のことも色々分かり楽しい。なお、下のねずみの尻尾はイラスト風で北斎の絵らしい。

## P10. 野馬



上は「北斎漫画」の絵（19世紀中頃の作?）。下の右は15世紀末、イタリア人画家ポッティチェリ作の絵。左は20世紀初期、フランス人のマチス作の絵。それぞれ時代も国も画風も違う。北斎は馬、他の二人は女性と描く対象は異なるが、一つ共通点がある。いずれも時計回りに回転しているように見える。時代や国を超えて絵の巨匠の考えに共通点がある? 興味をそそがれる。

※ポッティチェリ作「春（部分）」→

※マチス作 「ダンス」↓

